

社会は、ひとつの装置であって、 社会的現実をうみだす

橋 爪 大三郎

いまかりに社会は、あたかもひとつの装置のようであって、刻々に社会的現実をうみだしているのだとしたら、どうであろうか？ われわれの営むあらゆる種類の社会的な生は、のこらずこの社会的現実^に属する。「社会」なるものをそれとして考察しようとするたぐいの試みにしても、例外ではない。だとすれば、社会学がかって、社会とみずから対峙しそれを解析しはじめた知性たるを誇ったときにも、その営みはすでにどこか別のところであらかじめ仕組まれていた疑いがある、なぜというに、社会を見出す眼の働き具合も、また見出される側の社会の作動の仕方も、ともにひとつの社会的現実^に浸されていることになるはずであるから。ところが実際、事情はそのようである。それゆえにこそ、社会学は、そのあらゆる実証的な外見にも拘わらず、擬似科学へとなお自閉させられているのだ。したがって、まずまっさきに暴くべきは、こうした社会的現実の生成の秘密を描いて、ない。社会に関わりきろうとする知の企図——社会理論——の直面すべき課題の第一がここにある。如上の事実に盲目なままの無方法な学的営みは、必ず平板なイデアリズムか散漫なマテリアリズムあたりに収束してしまうにちがいない。

社会がただ客観的な対象のようにあるだけのものならば、それを、たとえば一望のもとに見渡すこともできるかもしれない。しかしそれは、素朴な思いこみと言うべきである。社会とは、かろうじて思考可能であるとしても、かならずしも観察可能ではない。そこで、社会理論の土台となるのは、ただ思考可能であるような社会（の像）なのであるが、これをさしあたり<記号空間=社会>モデルとして描きとめることができると考えよう。このモデルをなりたせる枢要な2契機とは、(古典的な枠組みのなかで信じられてきたような)個と全体とではなくて、(空間の)局所性と全域性とである。すなわち、

社会は、局所性と全域性とをそなえた、ひとつの空間である。

この両契機の角逐は、社会的現実をとすれば、互いに相剋しあうふた通りの現実性（唯物論的／現象学的リアリティ）へと剥離させるように、はたらく。

社会理論は社会をどのようなかたちで掬いあげればよいのか？ 社会もまた他の諸現象と同じく、何らかの事象の複合としてなりたっているに相違ない。社会事象を他の出来事からとりわけきわだたせているところがあるとすれば、それは社会事象が、人間の相互にとり結ぶ関係にかかわる事柄である点であろう。しかし人間という言い方ではいかにもあいまいであるので、われわれはこれを身体として概念化しておくのがよい。身体は、社会の局所的なありかたである。<記号空間=社会>モデルは、複数の身体が、相互に外在しながら、ある連繋をもって集合するさまを描きだすための、相対論的一位相論的モデルであることになる。

身体概念をさらにちがって考えてみる。森羅万象がなんらかの秩序をもって生じつつづ

ているものだとすれば、それを諸々の事象のとどまるところなき交錯と波及の網とみなすことができるだろう。そのなかから、事象の生起のある系列を、事象の連鎖としてとりだし、たどってみる。すると、身体は、そのような事象の連鎖がつぎつぎ求心的に集まってくるような場にあたっている。しかもこの求心的な過程は際限がない。(それはむしろ、身体が、心的領域をたたえるような知覚と了解の構造をとなえていることによる。たとえば記憶や反省などの心的作用の涯のなさを想起しよう。) それゆえ、

身体は、事象の連鎖の無際限な求心構造をそなえている。

身体をこのように規定しておくこと、われわれの知識や心的内容を、身体において身体像が孕まれ世界がうまれる仕方に、すなわち了解のはたらきに即して、原理的に考察してゆくことができる。

身体はいずれも、己れが身体であることを了解している。この了解のはたらきはすべて、たしかにこのような身体のうへにおいて生起しているはずであるのに、それをわれわれは、己れ(の身体)のそとの出来事として(も)攬む。このようなことは、身体がそのなかにもうひとつの身体(=身体像)を拵えることを抜きには、決して可能とならないにちがいない。われわれは誰しも身体としてあるから、身体のことならよく知っているように思っている。しかしそうした内容の一切は、身体が身体それ自身へとあらわれる仕方、すなわち身体像に、ほかならない。こう気づきうる以上、身体そのものは、たかだか思考可能なものとして、のこされてある。

身体像を与える了解のなりたちは、あらましつぎのような手順によっているだろう。まず身体は、遠隔からやってくる事象の連鎖を、その求心構造へととりこむ。このときこの事象の連鎖(=知覚線)は、身体のなかへどこまでも落ちこんでゆくことができる。それは身体が、自らの無際限性を根拠にして、知覚線を心的領域のより奥深くへと延長するからなのであるが、そうして十分延長しておいた知覚線を途中で然るべく切断するならば、その断点から内側をあらためて身体のための領域として区画することができるだろう。この区画は、身体像の外郭を与える。ざっくりいうと、この切断は、身体のなかに身体(像)に属さぬそとをつくりだす。(身体がわざわざこのようなことをするのは、実際これらすべての事象が当の身体とは別のところで生じるわけではないのに、それらを一定の時間-空間軸のもとで、身体を離れた出来事のように再構成しなければならぬからである。自らの求心構造へとおちかかる事象の波及を一様にこうして処理する仕方が、了解という営みにちがいない。

了解は結局、身体から身体のなかへの縮小写像のごときものをかたちづくる。縮小写像はかならずあるひとつの不動点(fixed point)をともなう。したがって、縮小写像としての了解は、身体(像)のまんなか、虚焦点のごとくに、主観(了解にともなう不動点)を結んでしまうことになる。主観は、なんらの実体ではなくて、了解のはたらきに随伴する含意としてあらわれでてくるものにほかならない。その一方で、了解は、主観との対極に、身体像やそこから切りはなされた諸々の客観をうみだしてゆく。これらは、身体の方節/統合の展開と結びついて、世界へと秩序づけられる。

ところで、ある事態を捉え了解するために、身体は、自身の無際限なることを手掛りとして用

いた。すると、そも無際限であるような事態そのことを、了解しつくす術はないことになる。他身体は、ひとつの事態であるとしても、了解の与える世界のなかで、あきらかに特異な位置を占めていると言えよう。一方でそれは、身体である（無際限な求心構造をそなえている）からこそ、身体でない他の定在（事物）から区別されてあるにちがいない。しかし他方、その求心構造の内実がそこからうかがいしられたり、その了解の内容が余すところなくよそへ漏れだしたりするようなことは、あるはずもない（主観の一意性）。身体が身体を了解（しよう）することには、こうした逆説がつきまとう（Husserlの蹉跌）。おそらくそれは、了解されず、ただ示されるしかあるまい。自身は、虚焦点のように主観を結ぶことで自らの無際限なることを示すが、他身体は同じことを、表現を通じて示すのである。

了解とそれを支える求心構造とは、実のところ、身体の消極的な契機にしかすぎない。いまや身体の積極的な契機（行為ないし表現）に注目する必要がある。

（身体に固有な）行為に発する事象の遠心的な過程として、表現がある。

人間の行為は、それなりの形式によってかたどられている。

身体は、運動の随意であることにもとづいて、生理体の性能であるみずからの挙動のなかに、「怨意的」な対立をもちこむことをする。この対立は、一方で身体を分節／統合づけているはずのものであるが、それと同時に、身体を環境をなしている事象そのもののうえに、差分（difference）にもとづく一連の形態を実現することができる。（ひとはここに、表現の本質をみとめてもよい。表現は、うちにあるなにかが表へと現われでてくることでもなく、また、たんに実在的な事態の存在性格でもない。それは、身体に発して空間へと波及してゆく、間身体的な境界現象である。）随意である運動は、身体の求心構造の十分な外周にあって、他身体へも波及しうる事象の連鎖の、ちょうど起点をなす。このいみで、それは、身体をめぐる求心性と遠心性との分水嶺をなすといえよう。このような随意性にみちびかれ、身体上に生起する、形式にかたどられた事態をば、行為とよぶのがよい。行為もまた事態（＝事象の複合）であるから、そこから自身・他身体をはじめとするあらゆる方位へと、事象の連鎖が遠心的のびてゆけるだろう。表現とはいうなれば、行為を震源とする間身体的な輻射なのである。

身体はこうして、互いに他に対して表現者としてふるまう。それゆえ社会は、表現を営む諸々の身体の集合態であり、それらの全域であるだろう。身体は、この全域のなかで、社会の局所場（トポス）を与えている。これら身体を相互に連繋させ、社会にその実態を与えるたぐいの事象の連鎖を、（固有の）間身体的作用力と規定するのが適当である。これは、単なる自然的な作用力（事象の連鎖）のうえにたちながらも、それとは区別される独自の準位において、社会の局所から局所への波及をかたちづくるような作用を保っている。こうして、社会を解明しようという社会理論の企図は、間身体的作用力を追究するというより具体的な主題におきかわる。

間身体的作用力のはたらき方をもっと詳しく考えてみようとするなら、いろいろの可能性があらうが、さしあたりわれわれが採用する作業仮説はつぎのものである。

（広義の）間身体的作用力は、①自然力、②〈性〉、③〈言語〉、④権力、の4つの種別からなる。

この仮説を、4作用力説といおう。これは、間身体的作用力の種別がただの4つに限られること、それらは互いに厳密に区別されるとしても、そのほかの諸現象はすべてそれらの組みあわせからなるものとして十二分に解明できることを、主張している。

自然（的な作用）力とは、すでにのべた事象の波及そのもののことをいっており、当然にも、あらゆる現象の根底にあってそれをひきおこしている。社会的な作用力（固有の間身体的な作用力）といえども、のこらずこのような自然力のうえになりたつものには違いない。そのいみで、すべてが自然力に還元されてしまうかにみえる。しかし、われわれは〈言語〉（後述）をもってこの表現の回路は、自然現象とみなすのがまったく不適當であるような独自の準位にあって、社会の骨格をかたちづけている。〈言語〉を行使することで、まぎれもない表現者である身体は、〈性〉、〈言語〉、権力、の3つの作用力を介して、互いに連繋しあうと考えられる。

まず〈性〉であるが、これを、身体が身体であることを通じて相互に直かにはたらくつぎのような作用力と規定しておくのがよいだろう。

〈性〉の作用力は、（他）身体が（他）身体像として了解される感性的な仕方を通じてはたらく。

〈性〉が身体と身体のあいだに孕ませる関係とは、その即物的なつながりでもなく、またまったく内的な径路によるでもない。そのいみで、〈性〉は両義性を刻印されている。（これはつまるところ、他身体が存在性格が両義的にあらわれざるをえないことに根ざす。）〈性〉とは、かならず〈言語〉を介して交渉しあうものである身体がなお、〈言語〉のそとに残しているような、（狭義の）性領域を含むような身体の相互性の領域全体をさす名称である。

身体と身体とがとり結ぶ事象的な関係で基本的なのは、出生と性愛のふたつにちがいない。これらは、〈性〉空間を構成するうえで要素的な契機となる。とりわけ、身体が（他のもうひとつの）身体からうみだされて始まることは、身体の自然的な必然をなす。この事実を、身体の自己了解の内容を限界あるものにす。個体は、他身体へとさかのぼる自らの出自を、自ら掴むことができない。だとすれば、出生という基本的な事実を含むような〈性〉空間の全域を了解づけることは、ただ擬制的に（すなわち、自己の了解を他者による了解へと無理やり接続させるようにして）しか、成立たないことになる。（〈性〉空間は、このような理由から、権力を招きよせるであろう。）人が互いに〈性〉関係の模糊とした牽引や反撓をきりわけてゆくとき、性別や婚姻、母子関係といった諸範疇が、〈性〉にかかわる規範として生じてくる。これら分節された要素的な〈性〉関係は、身体の集合態がおりなす〈性〉空間に対する、代数的な語彙を与える。こうして、任意の〈性〉関係が客観的なものとなり、透明に分析されるようになる。（いわゆる単純社会であれば、〈性〉空間の含むいかなる〈性〉関係も、こうした語彙の乗積によって記述しつくされるであろう。）権力は〈性〉空間をこのように透明な一連の〈性〉関係へと結晶させ、親族

秩序を実現する。

身体の普遍的な経験とは、このような〈性〉空間へとうみこまれたのち、生成局面から熟成局面へと発達をたどってゆき、ついには〈性〉的な世界を十分了解するに足るだけの態勢を自らのうちに用意することである。この過程はたぶん、身体のもつ志向的な内発性によって貫かれているが、そのとき近親者は、出離すべき身体の初源状態と同致される。それゆえ、近親姦禁忌もまた普遍的な内容をもちうる。

〈言語〉は、身体の規範的な律動に発する作用力である。

ここで〈言語〉とよぶ作用力は、ふつうにいう言語ばかりでなく、事物などのかたちで定在するようなさまざまな社会形象に関係する。というのは、それらの形象は、言語との協応に支えられてその形態を実現しており、したがって、身体に対して規範として作用を及ぼすという存在性格を有し、かくして言語に匹敵するだけの社会的な作用力たることをえているからである。(ここで規範とは、法のような社会規範のことではなくて、それよりもずっと深いところで社会が身体をとらえ成形する仕方である。こうした規範は、身体の普遍的な現象であるが、社会ごとにいわば特有の波形を保っており、身体の挙動をそれに即した律動へといざなうのである。)

言語は、もっぱら意味にたずさわるような、人間に特有の行為である。これをただ外からながめる限り、他のどんな行為からもとりたててきわだたないようにみえるかもしれない。言語がきわだつのは、それが行為でありながらも、運動の直接態をつねに脱しており、ただ抽象的な指示関係を経由して成立している点である。(指示のはたらきは、発語(表現)の分節/統合が、了解の分節/統合と、ある対応をもつところにある。)

言語に語彙と文法とがみとめられるように、行為にも身体図式と統合構造とが具わっている、と考えることができるだろう。すると、言語と(それ以外の)行為とは、ともに身体に発する表現であるが、それが波及してゆく仕方にはいささかの差異がある、と気付かれる。言語であれば、その意味するところは、たちどころに身体に受容される(あるいはされない)のがふつうである。それに対して、行為は、その産物を介して、他身体へと波及してゆくかもしれない。加工品そのほかこうした行為の産物は、ある身体によって措定され、現にあらゆる身体の外にある間身体的な第3項であって、時間的空間的な遠隔にまでも到達しうるような形態の慣性をもつので、〈言語〉的定在とよんでもよい。(定在とは、刻々に自己を更新しているような事態であって、そうやって減衰にたえ自らの形態を保っている。文字は、書記表現が定在したものというみでは、言語の指示作用を担っているが、規約によって個々の発話の形式を事物のあいだに定着させる工夫であるという点では、〈言語〉的定在の特殊場合をなしている。) このように、〈言語〉的定在は、一般に行為が他身体へと波及していく間身体的な輻射の、粒子的な側面をなしている。それを〈言語〉的と称するのは、表現する身体が、行為—了解—言語の協応のなかですでに態勢づけられ、熟成をとげているからにはかならない。

〈言語〉的定在は、物的な基盤をもっているから、経済領域を区画するうえで重要である。これは、行為の統合構造を複合化し、連合構造を展開してゆくうえで、欠かせない演算子である。

とくに、〈言語〉的定在が諸々の身体をひとつの行為秩序へととりまとめる、権力の結節点のように現象する場合(とりわけ資本として機能する場合)を、この議論は射程におさめることをねらっている(資本制空間論)。

権力は、了解の集合性を経由して、身体にはたらくような作用力である。

権力のはたらきを、いわゆる暴力装置が発動するむきだしの物質力のためから区別しなければならぬ。権力によって社会の全域が堅固に編成されている場合には、たしかに、このような物質力が局所的にはほとんどいたるところに出現できるにちがいない。そのため、こうした現象は、権力の明白な徴標として依然有効でありつづけている。しかし、だからといって、それら実力の総和によって権力秩序が生成されるとみるわけにはいかない(レーニンの誤謬)。むしろこう考えよう——権力の作動をそのいたるところで支えているのは、各自の了解のいとなみである、社会の全域に当該の権力秩序を成立させているのは、それら了解の集合性である、と。

集合する身体がてんでいとなむ了解の内容は、なにか? それは、つまるところ、身体が集合しているという当の状況そのもの、各身体がめいめい勝手にうみだしている了解の内容でなければならない。すぐわかるように、このような了解(すなわち、全域にわたる了解の集合性を、ある身体という局所にすっかりもたらしてしまうこと)は、実現不可能である。そのため、あえてそれを実行しようとすれば、その試みをただどこまでも繰り返すでもするぐらいしかない。こうした反復のはてに、各身体はおそらく互いに、擬制的な了解の環を張りめぐらすようになる、と思われる。虚構(=了解の制度)がこのようにして成る。了解は、互いが互いを繰り返すことによる結果、いわば空間を彎曲させてしまい、身体をその空間のなかに自閉させるのであるから。したがって権力とは、第一義的には、ひとつの空間(=身体の集合態)の属性である。このように虚構のなかにとらえられ、一様に編成を被る個々の身体の在り方が、権力の現象形態である。こうした虚構の培地のうえで、多数の身体が組織や軍隊へと結晶できる。またたとえば、資本制は、このような仕方で身体を監禁する装置(=資本)の、相互肯定のための集積回路である。

権力秩序のなかでは、しばしば権力的な人間関係が目につくように、思われるかもしれない。しかし、その関係が権力的なものでありえているのは、けっしてその当事者の誰かが権力的であったり権力意志に富んでいたりするためではない。むしろ、いまのべたような了解の円環を、各自がその背にしのばせて出会う限りにおいて、なのだ。たとえば、ある命令が発話され、それが実行されたと考えてみよう。発話の内容を分析してみるなら、それがいわゆる「命令(文)」であったことの言語学的な証拠をなにか、みつけることができるかもしれない。しかし、それを執行力ある命令としているのは、関係者の了解がそこに自らを預けている、共了解とでもいべきものである。このように集合的にはたらく了解は、権力の作動をどこまでも奪人稱化することができる(法的言説、託宣)。それは、発話の主体が、いずれかの身体だというより、むしろ事実上このような了解の円環であることをいみしてしよう。社会規範がかたちづくられたり、書きつけられたりするときには、すでにこのような権力秩序が空間の全域をおおっていることが、前提である。

ここまでのべたような間身体的作用諸力は、各身体に発してそれらのあいだをとびかい、身体の集合態であるような社会空間をみだしている。したがってわれわれは、いまやつぎのように言うべきである。

社会は、間身体的な作用諸力によって張られ、諸身体の全域からなるような、記号空間である。

社会を記号空間であるとよんでもよいのは、それが一定の形式（規範）のうえになりたつ秩序であるからにはかならない。そのような形式を定立する活動が表現であり、とりわけ〈言語〉につらなる営みである。「記号空間論」は、上述の総括的な仮説命題を、あらゆる領域で肉付けしてゆく作業である。

さいごに、このような社会が基本的に帯びることになる歴史性について、のべておこう。

間身体的作用力を經由して与えられる社会の現存性として、歴史がある。

〈性〉や権力は、概して同時的に作用すると言えるだろうが、〈言語〉的定在を介する身体から身体への作用力の波及は、基本的に一方向的なものであり、非対称的である。ここから、社会空間に、歴史が萌しはじめる。歴史は、単なる時間の経過や出来事の時系列とは、まったく別のことである。だから各自の身体が順次に出生と死滅を繰り返すとしても、そのことはいっこうに歴史でない。肝腎なのは、刻々の現在が差異づけられることであり、それは事物の布置によって可能になる。大まかに言えば、社会がいま抱えこんでいる諸々の事物が、その社会の現在に対して、過去を与えている。〈言語〉的定在とは、(死者を含めて) 既往の身体の諸活動が蓄積されて現存するかたちであるのだ。そこで、あれこれの事物にゆきあう身体は、そこからの作用力の照射にさらされ、歴史的な規定を否が応でもうけとることになる。

歴史性とは、生ける能動的な身体の現在に対してかけられてくる規定性である。したがって歴史は、本来、局所的にあらわれるものである。歴史は、どこか外側に横たわっているのではなく、あなたやわたしの刻々の現在のなかにあるのだ。(固有の) 表現は、表現の過去や情性に抗しそれを振りきって、むしろみずから歴史の側へ参入してしまおうとする試みである。ほんとうに創造的な表現は、身体の既往の分節／統合を揺るがせ、蘇生へ向けて強くうながす力をもつだろう。

しかしまた、ひとつの時代や状況とよばれるものが深く歴史に浸されてあるのも当然である。集合する身体は、それらが単一の権力につなぎとめられあるいはひと続きの分業系をなして結びあっている場合には、そこらいつどきに歴史的な規定をうけとる。それら身体はいわば、歴史の与える事物のステージの上のり、互いを互いの同時刻圏に縛りあっているのだ。このようにしてわれわれは、ある時代をともにし、同一の課題のまわりでせめぎあう。

歴史は、社会理論に対しても、時代の課題をつきつける。いまその最大のものは、社会空間の資本制的秩序の作動を解きあかすこと、そのような資本制空間の命運を見極めること、それにとってかわるはずの記号空間の秩序をありありと描きだすこと、であるだろう。この作業をなしと

げるための戦略とは、〈言語〉を導きの糸とし、社会事象の一切を身体・言語・事物の絡まりの糸として解きほぐしていくこと、これである。この作業を成就することで、われわれはわれわれをこの時代から自由にし、歴史にかけてない輝きをつけ加えようではないか。

【あとがき】 本稿は、準備中の『記号空間論』のための草稿から、昨年まとめた『記号空間＝社会』、『間身体的作用力論』（いずれも未発表）をえらんで、要旨に圧縮、補筆したものです。要約であることもあり、読みづらいものになったのではないかとおそれますが、必然に導びかれて仕事をしているつもりですので、広汎に理解のえられる日がくると信じています。

(はしづめ だいさぶろう)